

第3号

ふくちしゃ

通信

福知山公立大学
まちかどキャンパス吹風舎発行／谷口 知弘
執筆／小林 航也
編集／中村 心美
／藤原 凜乃

発行日 2023.03.09

“わかもの”の協働で福知山に活気を

第2期学生スタッフ活動中

ご無沙汰しております。福知山公立大学まちかどキャンパス吹風舎学生スタッフです。学生スタッフは、新町商店街の一角にある第二の大学「吹風舎（ふくちしゃ）」を拠点に活動しています。福知山市主催イベントへの協力をはじめ、広報誌やホームページの作成、吹風舎活用方法の考案など、さまざまな業務に日々奮闘しています。

今年度は新たなメンバーを迎え、計7名で活動しています。地域に根差す大学生として福知山を盛り上げていきたいと思っておりますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。



『未来ラボ』を学びと実践の機会に

福知山をはじめ、地域で活躍する人物の話から、高校生や大学生が地域を知り、まちの未来、ひいては自身の生き方について考え、意見を共有する「わかもの会議」――。

高校生と大学生が福知山で「やってみたいこと」に挑戦し、協働を通して地域への関心や愛着を醸成する「ふくちゼミプロジェクト」――。

昨年度は独立して行われていたこれらの取り組みが、今年度は『福知山市若者まちづくり未来ラボ事業（以下、『未来ラボ』）』として統合しました。「わかもの会議」は1年間で全3回開催し、「ふくちゼミプロジェクト」は全4チームがプロジェクトの実施から最終報告までを終えました。

2022/06/04

第1回わかもの会議×ふくちゼミプロジェクトキックオフ会議

言うことは、「先を見通して計画を立てることの大変さと、挑戦した結果、それが実現することのうれしさ」でした。実際にプロジェクトを完遂した人の話だからこそ、説得力があり、参加者は彼らの話に聞き入り、刺さるものがある様子でした。

プロジェクトの魅力を語る



先輩の話を熱心に聞く今年度の参加者

「第1回わかもの会議」では、昨年度に「カラフル高校生がつくる傘で彩られた空」に取り組んだ谷口こころさん（福知山成美高等学校3年生）と、「オンラインプロジェクト」に取り組んだ荒川琴美さん（福知山高等学校3年生）、籠屋芽ルモさん（福知山成美高等学校3年生）の

お三方をお呼びし、講演を行いました。三者とも今年度は受験生の立場となり、残念ながら『未来ラボ』への参加は叶いませんでしたが、今年度の参加者に対して、先輩として昨年度の経験談を彼女たちなりに熱く語りました。プロジェクトこそ異なりますが、彼女たちが口をそろえて

「わかもの」による
「わかもの」のための講演

プロジェクトの事始 まずは交流と学習から

「第1回わかもの会議」に引き続き行われた「ふくちゼミプロジェクトキックオフ会議」。まずは高校生や大学生の参加者が取り組みたいプロジェクトについて意向調査を行いました。

各プロジェクトのけん引役となるプロジェクトリーダー及びマネージャーは定められたテーブルごとに座り、参加者に対してプロジェクトの内容を丁寧に説明しました。

一方で、参加者からはリーダーやマネージャーへ自ら質問を投げかけている姿もあり、双方のやり取りの中で良い交流が生まれていました。

人数の差はありましたが、全員が自分の「やってみたい」プロジェクトを決定できました。

メンバーが決まると、次は学生スタッフによる「情報リテラシー講座」が行われました。当講座では、SNSを通じたトラブルに巻き込まれないように情報を適切に判断する必要性を説きました。

実際の事例に基づいてクイズを出題するなど、参加者の印象に残りやすい工夫が施されていました。

続いて「スラック講座」が行われ、情報共有のためのアプリ「Slack（スラック）」の使い方を、学生スタッフが参加者に伝授しました。

すぐに使える便利な機能から取り扱う上での注意点に至るまで、学生スタッフが丁寧に説明しました。そして、学生スタッフの援助のもと、全員で動作を確認しました。

2022/07/09

谷口 知弘先生による ファシリテーション講座

「ファシリテーション講座」では、福知山公立大学・谷口知弘先生が『未来ラボ』参加者に対して、活発な話し合いを促進する技術を伝授しました。

参加者一人ひとりが自身の抱える「私の困りごと」をグループ内で共有し、メンバーからアイディアを引き出すことに挑戦しました。

1人につき10分という短い時間の中で、参加者は多くのアイディアが生まれることのうれしさや楽しさを噛みしめていました。

また円滑な話し合いには、それ以前の場づくりや、話し合いの「見える化」が重要なことに気づき、実践を通してそれらを実感している様子でした。

開館情報

まちかどキャンパス吹風舎

* 開館時間

○火～土曜日：13:00～18:00
→土曜日は完全予約制
→祝日、年末年始、お盆等は閉館

* 所在地

○福知山市字上新7番
→施設の駐車場はございませんので、お車でお越しの際は近隣駐車場をご利用ください。

* ご利用可能スペース（一般の方）

○1階共用スペース（10名様まで）
→団体（5名様以上）… **事前予約必須**
→土曜日… 人数に関わらず**事前予約必須**

* ご利用料金（貸切の場合）

○1時間 400円（空調使用 600円）
○土曜日の貸切料金は1割増し
○貸切でない場合は**無料**

* 連絡先

☎電話：0773-45-3087
✉メール：machikado@fukuchiyama.ac.jp
※ご利用の際は、マスク着用、手指消毒、検温等、新型コロナウイルス感染防止対策へのご協力をお願いいたします。

「私の困りごと」を応援！

高校生・大学生、

話し合いの楽しさを学ぶ



谷口知弘先生によるファシリテーション講座



高校生と大学生を交えたグループでの話し合い

2022/08/10

第2回わかもの会議×ふくちゼミプロジェクト中間報告会

「今の自分」が
やりたいことを

「第2回わかもの会議」では、福知山に生まれ、一度は転出するものの福知山にUターン移住し、福知山で起業するという共通の背景を持つ吉田佐和子さん（クラリネット奏者／起業家）と、羽星大地さん（株式会社Craftbank・CEO）のお二方をお呼びし、講演を行いました。

吉田さんは、自身のように地元に戻ってくる人が必ずしもすべての人にとって良いとは言えないとしたうえで、自分のしている何かが誰かにとっての幸せになっていることが重要だと説きました。

一方の羽星さんは、今自分のしていることが将来どんな形でつながるか分からないけど、気になる何かがあるなら、とりあえずやってみてほしいと強調しました。やりたいことや必要なことはその時にならなければ分からない。だ

移住者発掘
プロジェクト

移住者との交流を通して福知山での暮らしの魅力を発信。
人を呼び込む糸口に。

廃校利活用
プロジェクト

福知山の廃校を活用して地域住民どうしがさらに交流を深められる場を。

アフター大河ボタン
プロジェクト

「黒板アートグランプリ」を開催してまちの歴史を発信。日本全国とつながるきっかけに。

ニューふくシネマ
パラダイス
プロジェクト

福知山を「映画のまち」に!? 映画を通して、福知山での暮らしを豊かにすることを目指す。

「ふくちゼミプロジェクト」では6月から8月現在までの進捗状況をプロジェクトごとに発表した上で今後の課題にも言及しました。各プロジェクトは行き詰まっている点にも触れ、その後の意見交換会では他のプロジェクトに対してアイディアを募りました。

「総当たり戦」形式で、4プロジェクトがその実現に向けて着実に歩を進めています。

他のプロジェクトとの意見交換

アイディアを成功の足掛かりに

Instagram



(株) Craftbank



(株) Locatell



羽星大地さんによるご講演



吉田佐和子さんによるご講演

2022/12/18

第3回わかもの会議×ふくちゼミプロジェクト成果報告会



FLOOP さんによるご講演
(奥手から順に、守谷杏奈さん、大嶋明香さん、赤井貴恵さん、臼井若菜さん)

いろいろな人生の中で
いろいろな行動・経験を

子育てと仕事を両立させながら、「好き」「得意」を活かしたい……。そんな共通の思いのもと、福知山を拠点に結成された、女性の、女性による、女性のための任意団体「FLOOP（フループ）」さんを「第3回わかもの会議」のゲストとしてお呼びし、講演を行っていただきました。



学生たちの意見交換会

フループは、悩みを抱える女性と同じ目線・同じ立場で、自分たちの経験を共有することと解決へと導く団体を目指していると言います。

メンバーの一人である大嶋明香さんは、「得意なこととみんな違うからこそ、メンバーで補い合える」とし、一人ひとりの「やりたい」をメンバー全員で支え、実現していることがうかがえました。

また、会場の高校生や大学生に対して、大嶋さんは「大人になると失敗が怖くなる。若い

うちにいろいろな経験をしたい」と強調しました。

続いて別のメンバーである守谷杏奈さんは「いろいろな人生があると思うが、まずは行動してみたい」と呼びかけました。

フループさんからの熱いエールは、不確かな社会で将来に不安が募る学生にとって大きな励みとなりました。

ご講演後の、学生による意見交換会では、どのグループも時間が足りないほど盛り上がり、うきうき様子でした。

功臣明智光秀

The Greatest Vassal of Nobunaga-Oda

天下統一を目指す織田信長にとって、朝廷の存在は不可欠であった。その理由は2つある。1つは、室町幕府15代将軍・足利義昭との対立を防ぐこと、もう1つは、当時はまだ新興勢力であった自らの権威付けをすることである▼武骨で野性的な武将が多くを占める織田家中において明智光秀は、諸学に精通し、和歌や茶の湯を好んだ数少ない文化人の1人であった。それと同時に、朝廷とのつながりの深い細川藤孝や吉田兼見とも親密な関係を構築していたのである▼これらのような理由から、光秀は信長に、**朝廷との間を取り持つ役割**を任されていたとされる。

『明智光秀 50 の謎』マイウェイ出版株式会社（2019）より

「わかもの」の活躍に

期待を込めて

「ふくちゼミプロジェクト」成果報告会「は、この1年間の集大成として、4つの各プロジェクトを取り組んできたことを発表しました。

質疑応答では今後の展望を問う見学者もおり、「（今後）ぜひ続けてほしい」という期待の声をいただきました。

福知山の活性化に奮闘し、実現を果たした「わかもの」たち

の姿は頼もしく、自信や達成感に満ちていました。

「未来ラボ」を通して、試行錯誤の末に新たな学びや成長があることを、参加者らは教訓として得られたのではないかと思います。

福知山での「わかもの」たちの今後のさらなる活躍に期待を込めて、ご報告に代えさせていただきます。

Bartender バーテンダー X の思惑

飲酒運転、暴力、アルコール中毒など、お酒に関する負の側面は払拭し難い。

一方、お酒は元来、コミュニケーションを促し、人と人をつなぐ役割を果たし、人の心を癒してきた一。

人の豊かな生活に不可欠なお酒に日頃から向き合うバーテンダー。

福知山に潜むバーテンダーに接近し、その心の内を探る一。



今回、取材に応じて下さったバーテンダーは、『LUCHA DEL SOMBRERO』（ルチャ・デル・ソンプレロ）の代表・吉浪 弘人（よしなみ ひろと）さん。お客さんたちからは「ヒロさん」の愛称で親しまれている。2022年11月17日にお店を訪問し、ヒロさんの人生とお酒について尋ねた。

LUCHA DEL SOMBRERO

〒620-0875 福知山市字堀蛇々端 2749

☎ 電話

■ 0773-21-6958（固定）

■ 090-1135-1911（携帯）

✉ メール：two-face@ezweb.ne.jp

バーとの出会いはアルバイト お客さんの期待に応えたい

ボクはかつてプロのロックミュージシャンを目指し、大阪でロックバンドに没頭していた。バーと関係を持つようになったきっかけは、バンドの先輩からバーでのアルバイトに誘われたこと。もともとお酒には興味があったので、週1回のアルバイトで、タダで飲めるお酒が楽しめた。次第に仕事にのめり込むようになり、バーで「お客さんの期待に応えること」を優先するようになった。そして、プロのロックバンドへの道を諦め、バーを営営することを決心した。

■ バーを営営することを決意したきっかけと、それまでの経緯を教えてください。

Instagram



LUCHA DEL SOMBRERO
(ルチャ・デル・ソンプレロ)

どんなに厳しい状況でも、これまでの経験を自信に



お洒落で妖艶なカウンター席



カウンターの向こう側には多くのお酒が並び

■ バーにおける新型コロナ感染症の影響は大きかったのでしょうか。

新型コロナ禍は、まるで映画の世界にいるかのような、生まれて初めての体験だった。とても貴重な経験をさせてもらったと思っている。

現在の心境としては「まだまだこれから」という思い。将来への多少の不安はあるが、今日に至るまで、それ以上に大きなピンチを乗り越えてきたという自信の方が大きい。

一品一品を大切に お客様の大事な時間を守る

■バーを経営する上で、ヒロさんが最も大切にされていることはございますか。

お客様に「感動」と「驚き」を与えること。

例えば、オシャレな内装だと入店時に感動を与えることができないし、カクテル1つでも、グラスの見た目や味によって、手元に届いたときの驚きを創出できる。

その上で、一品一品を大切にしている。ボクにとっては1日のうちの数十杯あるいは数百杯の中の1杯にすぎない。でも、お客さんにとっては1杯1杯が特別であるし、大事な時間だから。

■バーという場所でお客さんと接する点について、特に意識されていることはございますか。

年齢の壁をつくらずに、友達が自分の部屋に遊びに来てくれたような感覚で（お客さんと）接している。その意識で関わることで、自分の真心からのおもてなしができる。

接客とは、言葉遣いだけで見栄を張ることではなくて、お客さんに対して丁寧に接することだと思っている。

お客さんはボクの支え。ボクを応援してくれている「友達」がいるという自信を持ってバーを営んでいる。

自分への「ごほうび」に 「やけ酒」は絶対にしない

■ヒロさんにとって「お酒」とは何ですか。

お酒は1日を頑張った自分への「ごほうび」。帰宅後の晩酌として必ずいただいている。それは、たとえ体調が悪い日であっても。ボクにとつての「お酒」は、みんなにとつての休憩に飲む「1杯のコーヒー」みたいな感覚。

ただ1つ絶対的に決めていることは、つらいときや悩み事を抱えているときには、一滴たりともお酒は飲まないこと。いわゆる「やけ酒」は、お酒に逃げているようで格好悪いから。

■ヒロさんにとって、バーとはどんな場所ですか。また、社会的にどのような場所であってほしいとお考えですか。

お酒を飲むときの状況は人によって違う。つまり、楽しい時に飲むお酒も、悲しいときに飲むお酒もある。

そこにどのような背景があっても、結局は「この場所」に来て良かったと思うてもらえる場所であってほしい。それが1日の最後でも、昨晚の思い出も良い。社会的に（お酒に対する）否定派もいて良いと思う。バーの醸し出す怪しい雰囲気や、敷居の高い場所という印象のような、「危険な香り」「こそが魅力で、その「入りづらさ」が、ボクは好き。」

バーを、「来て良かった」と思ってもらえる場所に

■バーの魅力、とりわけ居酒屋や家飲みとは異なる点は何か。とお考えですか。

バーでは「気取って飲める」ところが魅力だと考える。もちろん、仕事の服のまま立ち寄ることもできるが、前もって予約しているお客さんにとっては特別な日。好きな服を着たり、オシャレをしたりして、テンションを上げて来店される。

見た目（容姿）も気持ちも変えて、そのお客さんにとってドラマ的な要素を創り出せる。そんな場所がバーではないだろうか。

そして、多くのお客さんには、そのような気持ちでバーに来てもらいたい。

編集者私見

ヒロさんとバーとの関わりにはさまざまな要因が関係していることがうかがえた。なかでも、ヒロさんのお酒に対する「好き」という気持ちは、ヒロさんとバーとを結びつけるうえで大きな役割を果たしたと考える。

その気持ちは今、多くの困難を経験し、それらを乗り越えてきたからこそ、より強くなっているだろう。そして、それがヒロさんの言う「自信」の源泉であると推察する。

レストランではない、かと言って日本の昔ながらの居酒屋でもない、大人にとつての「第三の酒場」としてバーの存在意義が、今後、さらに重要性を増してくるのかもしれない。

ミッドセンチュリーを想起させるテーブル席→

編集後記

今年度最初の発行が、今年度の総括となってしまいましたことを、この場を借りて深くお詫び申し上げます。今年度の振り返りとして記事をまとめましたので、1人でも多くの方に読んでいただきたいです。今後とも、何卒よろしくお願いします。

（まちかどキャンパス吹風舎 学生スタッフ広報部一同）

